

タウンミーティング（高岡会場 H30.6.9）における意見等の概要

1 活力

【ものづくり産業の振興について】

高岡市の代表産業であるアルミ産業は、特に住宅用アルミサッシやアルミ押出し製品については、出荷額において全国1位という誇りある地位を築いているが、将来に向けて個々の企業努力だけではなかなか難しい現状がある。業界としては、県や市の産業支援機関との連携や、大学の支援をいただき、新たな事業分野の開拓や差別化技術の構築、材料の研究開発等に取り組んでいくことを望んでいる。こうしたことも踏まえて、先月、5月22日に富山アルミコンソーシアム推進協議会が設立されたものと考えている。

本県は、言わずと知れた製造業中心のものづくり県だが、アルミ産業も自動車産業や機械産業と密接に関係しており、これらものづくり産業全体の振興、強化が望まれるが、県ではどのような支援、施策を推進されるのか。

（知事）

特にアルミは、水素への安定性とか、軽く、また高い熱伝導性という特色があるので、これをしっかり活かして、例えば、水素の輸送、貯蔵のための軽量の容器を開発するとか、小型のEVなどの軽量の自動車とか、あるいは熱循環型のアルミ製の植物工場ラックの開発とか、そういったことに力を入れていきたい。

それから、人材確保が大事なので、国のいろんなプロジェクトを活用して、首都圏の大学生が、実際の製造現場や研究開発プロジェクトに参加するようなインターンシップをつくり、ぜひ人材育成、人材の確保にも役に立てていきたい。

そのためにも、今までの工業技術センターを産業技術研究開発センターに抜本改組して、その中のものづくり研究開発センターで、製品機能評価とか、セルロースナノファイバーの実証、試作の拠点をつくり、さらに、（産学官が連携し、新たな研究開発プロジェクトを推進する拠点となる）オープンイノベーション・ハブというのをつくって、やっていく。

それから、併せて、総合デザインセンターの中のクリエイティブ・デザイン・ハブを去年秋に開設したが、これを機に、総合デザインセンターも大きくバージョンアップして、まさにここで、単なる交流ではなくて研究開発を進める。そのことに関心を持って、台湾だけではなくて世界、国の内外からデザイナーが集まる、東京などのデザインを希望する学生さんも勉強に来る、そういう場所にしていきたいと思う。

また、医薬品については、薬事研究所を薬事総合研究開発センターとして改組し、また最先端の設備も整備したので、ここでバイオ医薬品などを中心に、日本を代表するような研究開発拠点になるようにしていきたい。

【「富山のさかな」のブランド化の推進について】

新しい総合計画には、基本の政策に水産業の振興と「富山湾のさかなのブランド力向上」があると聞いているが、県として、今後、「富山のさかな」のブランド化の推進にどのように取り組むのか。

(知事)

富山の魚は、すごくおいしいのだけれども、必ずしもそういうふうの評価されて、それにふさわしい値がついていない、というのが結構ある。今、ベニズワイガニのブランド化はまだ途上で道半ばではあるけれども、大分評価が出てきた。これをさらに進めていきたい。

これをうまくやると、春はホタルイカ、夏はシロエビ、秋は高志の紅ガニ、冬はブリと、これで四季折々に富山湾を代表する魚になる。それは同時に日本を代表するおいしい魚ということになるので、ぜひ頑張っていきたい。

それから、富山県はとにかく港と漁場が近く、本当に20分か、せいぜい30分かからないで行ける。そこで昼競りもできるということだと思うが、よその県では漁場が1時間半ぐらいかかるというところが少なくないので、それだけ富山県の、富山湾のお魚は新鮮で、獲って来てすぐ味わえると、こういうことだと思う。

それから、併せて、やはりこれからはつくり育てる漁業も大事なので、キジハタとかアカムツとかの高級魚の稚魚の放流、こういったことにも取り組んでおり、特にキジハタは、早く種苗生産技術を開発して、今年度、滑川の栽培漁業センターに新しい生産設備を整備するので、これでキジハタが早く事業化できるようにしていきたい。今年まず、キジハタについては放流尾数が3万尾から6万5,000尾になる。今後も努力してまいりたいと思うし、また、漁協の皆さんにもご協力いただいて、私も軽井沢でトップセールスをやらせてもらったが、今後も大宮駅とかいろんなところでやっていきたい。

なお、今年、日本橋とやま館で、10月下旬に高志の紅ガニフェアというのを予定しているので、また皆様とともに頑張っていきたいと思う。

【中小企業の後継者対策（事業承継）について】

事業承継の経験者からすると、綿密に人・もの・お金の整理をしていくと、事業承継には、やはり10年ぐらいかかる計画になるのではないかと思う。従って、まだ決まっていないという方の多さと、それから決まっているけれども、5年ぐらいでできるんじゃないかという、ちょっと安易で後進的な考えがあることは問題かと思う。

そこで、ぜひ、県のほうからも、各種の経営者団体を通じて、この辺を強くプッシュして、学習の機会、気づきの機会を設けてもらうようお願いしたい。

（知事）

今回、富山県事業引継ぎ支援センターの相談員を、今まで1人だったのを2人に増やして、ものづくりの現場で実際そういう事業承継的なこともやったことのある経験豊かな方、また、銀行のOBで現実に関口としてお世話した経験のある方を配置する。

それから、併せて、例えば、M&Aといったようなこともあると思うので、銀行とかいろんなところとの連携をよくする。それから、全国のデータベースを活用し、そういうことなら自分が手を挙げますという方とのマッチングを行う。

また、県の新世紀産業機構の中に、行政と経済団体、金融機関合わせて約70団体からなる事業承継ネットワークを構築しようということで、6月下旬にキックオフ会議をスタートすることにして、そうしたネットワークをつくって、そのメンバーで事業承継を検討しているという中小企業の経営者の方に、どういう課題があるかとか、それをクリアするのにどうしたらいいかといったような事業承継の診断をやる、こんなようなことも考えている。

それから、また、どうも事業承継が必要なだけでなく、なかなか現に経営されている方が仕事に追われたり、あるいは何となく2、3年でできるのではないかと安易に考えておられたりする部分もあるので、事業承継というのはやはりそんな簡単な話ではありませんよということを、できるだけプッシュ型で情報提供する。8月の初めに中小企業の未来を考えるシンポジウムをやることにしていて、その際に、いろんな事例を経営者の方へご紹介して、進めてまいりたいと思っている。

2 未来

【教員の多忙化解消について】

先生方は、部活動や授業の準備、そしてさまざまな学校の行事など、子供たちのためにと時間を惜しまずに頑張っていたり、富山の質の高い教育は、そうした先生方の熱心な取り組みによるものと、ありがたく思っている。

一方で、その勤務が長時間にわたり、このままではあまりにも先生方が大変なのではないかと心配する声も出ている。富山の高い教育の質を保っていくためには、元気で生き生きとした先生方が、子供たちとしっかり向き合える時間を確保していただくことが何より大切であると思う。県としても先生方の忙しさを少しでも解消できるようにしていただきたいと思う。

(知事)

最近、県内でも、公立学校の先生がいわゆる過労死に当たるということで認定されたということがあった。教育現場で志や情熱を持って頑張ってこられた教員の方が過労死されたことは、まことに残念で痛恨の極みだけれども、こうしたことが二度と起こらないようにしたいと思う。

学校の場合では、やはり先生方が子供たちと向き合う時間をしっかり確保するというのが大事である。過労死と認定された方も、ほとんどの土曜、日曜を部活動などの指導で費やしておられたということだったそうだが、部活動の指導を担当の先生が全部やるというのは大変であるから、今回、部活動指導員という制度を新たにつくった。

また、教具づくり、プリントの印刷、採点の補助やデータ入力などを担っていただくようなスクール・サポート・スタッフ制度というものもできたので、射水市も含めて、この高岡地区全体で、全部で14校の小・中学校に15名、新たに配置することになっている。

また、外部の専門人材の配置も大事で、スクールカウンセラーという仕組みがあるけれども、これも国の目標を1年前倒して、全ての小・中学校に配置することにした。

それから、学校でいろいろいじめがあつたり不登校になつたりする原因が、むしろ学校というよりは家庭のほうにあるという場合も多いため、かねてからスクールソーシャルワーカーという制度があつたけれども、これも国の配置の目標よりもっと早くしようということで、全ての中学校区に派遣することにした。

それから、先生方の事務の負担を軽くするために、例えば事務連絡とかスケジュール管理とか、そういうことを電子化する共通の情報システムを全ての県立学校につくって、できるだけ先生方が、教員同士の情報共有とか、異動のときの引き継ぎも円滑にできるように、今、力を入れている。

【伝統文化・芸能の保存・継承について】

子供たちは、昔から地域に根づく伝統文化や行事に携わる経験を通して、郷土に誇りや愛着を持ち、郷土を大切に思い、根づき、郷土の発展を望む心を持つようになっていくと思っている。もちろん子供たちが参加することで、地域行事は明るく楽しいものになり、地域が活性化する。

しかし現状として、少子化や伝統を継承する人々の高齢化などにより、伝統行事や文化を、質を保ちつつ継続していくことが困難になってきている。県の新総合計画の中には、伝統文化・芸能については、「人づくり」・「未来」に言及されているが、具体的にどのような形で支援に取り組むのか。

(知事)

地域の伝統あるいは祭りとかを継承していくというのは非常に大事なことであるから、今度の新しい総合計画の中にもそのことはしっかり位置付けており、例えば、子供たちについて言うと、小学校の総合的な学習の時間とか、あるいはテーマによっては社会科とか、いろんな授業を活用して体験学習をしている。

例えば、射水市の小学校では下村の賀茂神社の御田植祭などについて調べ学習とか、あるいは3年生全員による稚児舞の体験とか学習発表などをやっている。それから、高岡市だと、横田小学校や川原小学校などで、5・6年生が御印祭の弥栄節などの練習をしているというふうに伺っている。

それから、放課後子供教室とか公民館などを利用した地域の伝統行事の伝承とか。それから、例えば福岡地区の菅笠や氷見市の藤箕についても、大人向けに後継者育成事業をやったり、藤箕などは小・中学生の段階でも体験ができたりといった努力をされていると伺っている。こんなようなことで、しっかり取り組んでいきたいと思う。

【「世界で最も美しい湾クラブ」加盟の効果と漂着ごみへの対策について】

富山県が「世界で最も美しい湾クラブ」に加盟が認められたが、その加盟の評価基準が、他の海洋の保護条約と比べると、海洋環境だけではなく、湾の景観、湾に存在する建造物や山などの自然環境に重きが置かれているように感じる。このような少し観光を目的にしたようなクラブに加盟したことでの、県内や国外の観光客の数や観光目的などは、どのように変化しているか。

また、現在富山県が直面している漂流ごみへの対策はどのように行っているのか。

(知事)

まず、「世界で最も美しい湾クラブ」の趣旨だが、もちろん美しい湾を活用して観光振興を図ろうという狙いと、同時に、その豊かで美しい湾を次の世代に残していくために環境もしっかり保全していこうという、2つの大きな目的がある。

そういう趣旨で、4年前に加盟を認められた際のプレゼンでも、富山県は美しい富山湾の環境を守るためにこういう努力をしているという話と、併せて、これを活かして観光振興を図っていきたいという話もした。また、来年の総会開催についてのプレゼンをこの4月にフランスでしたときも、大きく言えばその2つについて説明をさせていただいた。

湾クラブに入ったことで、具体的に観光の面で何人増えたとか、数字的なプラスがあるかという説明は、残念ながら、ちょっと統計上無理なのだけれども、ただ、例えばここ数年で言うと、立山黒部アルペンルートなどは外国からいらっしゃるお客さんがすごく増えている。そういう人たちは、当然、海越しの立山と美しい富山湾がセットの富山県に魅力を感じていらしている方が相当多いと思う。

来年は「世界で最も美しい湾クラブ」の総会、また時期は違うが、同じく来年のちょうど今ごろ、日台観光サミットが富山県で開かれる。そうすると、台湾と日本の観光の分野のいろんなトップの方が集まる大きな会議もあるので、この機会に、世界の皆さんに富山湾や富山県をしっかりアピールして、多くの方に来ていただくようにしようと思う。

それから、富山湾は、国が定めた環境基準を全てクリアして達成している（全国で河川・湖沼・海域全てで達成しているのは本県が唯一）。そういう富山湾というのは、私も誇りに思っているし、これはぜひ沿岸の市町や、また県民の皆さんと連携して守っていきたい。ただ、残念ながらごみはかなり漂着している海岸もやはり県内にあるので、毎年やっていることだけれども、今年も県民運動をやっていきたい。

それから、結局、上中流で河川に流れ込むごみはかなり多いものだから、小矢部川周辺などでは、例えば婦人会の皆さんなどが中心になられて、なるべく河川にごみ流れ込まないように努力もしていただいている。

3 安心

【海岸漂着物対策について】

小矢部川流域から出て六渡寺海岸に漂着しているごみの量が100トンとして、推定で0.1%から0.01%が海岸に流れ着くというふう聞いており、それらから逆算すると、小矢部川流域からものすごい量が富山湾に出ていっている。富山湾に出てしまうと、どうしてもそのごみを捕まえることは、もう本当に不可能であるから、小矢部川の中にある間に何とかならないか。小矢部川の中にあるときは、非常に時間と労力とお金がかかると思うけれども、捕まえやすい。なるべく富山湾に出さない方法を考えたらいかがかというのを提案したい。

(知事)

確かに海に入ってしまうと、なかなかこれを回収するといっても極めて難しいので、やはりその手前でやらなければいけないと思うのだが、川の中にある間といってもそう簡単ではない。やはりまずは、そもそも川に流れ着く前にいかに回収するか、あるいは発生量を減らすかということが、まず基本かと思っている。

漂着物の9割以上が大体プラスチックなり発泡スチロールで、その大もとが例えばレジ袋だったりペットボトルだったりということなので、こういうものを、まずはしっかり川に流れ込む前に回収する仕組みをつくっていかねばいけないと思っている。

富山県は、レジ袋の無料配布廃止というのをもう10年以上、全国トップでやっていて、マイバッグ持参率も95%ということだが、これにとどまることなく、今度ちょうど富山県で3R推進全国大会をやることになっているので、この機会に、消費者団体とか婦人会の皆さんとか、各地で努力されている皆さんと連携しながらやっていきたいと思う。

例えば、小型家電とか、ペットボトル、トレイ、こういったものは、これまでもなるべく回収率を高めるようにしているのだが、今まではどっちかというと消費者サイドや市町村等でやっていた。今年は特に、むしろ事業者の方を巻き込んで、例えば、小型家電の回収も、事業者の方のお店で回収できるような仕組みづくりを実はしたいと思っている。今後も努力していきたいと思う。

【食品ロス対策について】

昨年、県と県婦人会が協働で開催したサルベージ・パーティに参加したが、家で余っている食材を1人1品ずつ持ち寄って、皆さんとにぎやかに料理をするのは大変楽しく、また、私たちが思いつかないようなメニューをプロのシェフが提案されたのには、大変びっくりした。工夫次第で、食材をもっともっと上手に使いきれんということを実感できて、とても有意義な機会であったと思う。

今後、このサルベージ・パーティがさまざまな場所やグループで開催されるようになれば、食品ロスに関する関心が高まり、実際に手つかず食品の削減につながるのではないかと思う。

その一方で、いざ開催しようとした場合、プロのシェフがいないと不安な点もあり、また、参加者にきちんと狙いが伝わるかどうかも心配になる。今後、サルベージ・パーティを開きたいと思った際に、安心して準備し、円滑に進行できるようなアドバイスをいただくなど、県の支援をお願いできないか。

(知事)

今年、サルベージ・セミナーという事業をやろうということで、実は県の予算を措置している。例えば、各地でサルベージ・パーティのリーダーを務められる人材を育成するための講師を、東京の一般社団法人フードサルベージから派遣しようとしており、10回ぐらい派遣してもらえるような予算を確保したので、ぜひこういうのを活用していただけたらどうかと思う。

それから併せて、サルベージ・パーティの準備や進行のポイントとか、調理の事例などをまとめて、マニュアルをつくる。そういうことについても、県として支援させていただこうというふうに思っているので、ぜひ活用いただければと思う。

併せて、富山県では、使いきり3015運動というのをやろうということで、毎月30日と15日に冷蔵庫を点検して、できるだけ食材を使いきって無駄をなくしましょうとか。また、今年8月にロスゼロウィーク県民チャレンジということで、例えば小学校のクラスとか家庭のグループ単位で食品ロスの削減を競って、一種のコンクールをやるというようなキャンペーンも予定しているので、ぜひこういった面でもご参加いただければありがたいと、こういうふうに思っている。